

2018前期「福島の災害復興に学ぶ」第10回（開沼5回目）

○動画を見て、コメントを書いてください（200字以上）

"ビデオを見て、まず、戦後の成長のエネルギーは原子力だということをはじめて知った。経済においても、環境においても、やはり原子力は先進国には必要なものではないかと私は思う。だが、その原子力について多くの問題や反対があり、また、その問題は福島原発事故が起こってから目立つようになった。言い方を変えれば、事故が起こるまでは、人々は原子力に頼って生き、安定に電力を供給でき、むしろ人々は原子力に関心がなかっただろう。「大丈夫だ」と言う「信心」によって、事故の対策が緩くなってしまい、また、原発と共に暮らしていることを忘れてしまうのだろうと思った。

だがその反面、福島県民は原発と一緒に暮らしていくんだ、という意識が、「原子力つけめん」のように商品化され、広告にも放射線という言葉を使って売りにされていた。もし私が福島県民だったら、いや、福島県民でなくても、**原子力や放射線を売り言葉に使われること**に中傷被害を感じる。福島は震災が起きた後も、マスコミによって「原子力は危ない」などと煽り立てられ、被害を受け続けなければならないのだろうか。わたしは震災の直後、海外のメディアではあるが、「福島は沈没した」という報道を目にした。どのように伝えるかは、報道の自由ではあるが、**もっと現地の人に目を向ける**ことが、震災から何年経った今でも必要で大事なことだと思う。"

"「原子力村はなぜ生まれたのか」という副題にもあるように、フィールドワークなどから、なぜそこに立地したのか、なぜそれが維持され続けたのか、という観点から考察された点にとっても興味を持った。

今回の動画でいちばん興味を持ったのは、4.10に起こったことという項目の「新潟県議選で推進派がやはり勝ってしまい、柏崎刈羽は数年前に火災にあい、大変な経験をしたのにもかかわらず、それでも推進派が勝ってしまう。もちろんトップダウンで何かを変えていくということも重要だけれども、それだけでは問題の本質は見えない」という言葉である。私もその通りだと思った。

トップダウンのメリットは、上流から積極的にコミットし、意思をストレートに伝えることができる点であるが、一方で、トップの圧力が強ければ強いほど、その判断に信頼がなければ従わず、周りの声を無視して一方的に指示を投げていては、トップダウンは機能せず、むしろ反発を受けてしまうという点がデメリットとして挙げられる。

実際に現地では脱原発派が強固な集団を作り、反発している様子もうかがえた。これは、トップダウンのデメリット面が大いに出てしまっている。やはり、住民の意見をしっかり聞き、その意見に寄り添いながら組織の目的を示し、その目的に説得力を持たせることのできるトップが必要だと感じた。"

"福島は戦後発電によって地域を発展させており、過疎地に押し付けて住民は苦しんでいるというのは少し違うということを知った。歴史的には、原子力は村に都会をもたらすものだったのだとわかった。また、地元の方の原発に対する意識は外から見ている私たちとは違うなど感じた。福島で原発関係の仕事をしている人が多いため、原発がなくなれば多くの失業者が出てしまうので原発は、そういった面でも必要であったようだ。まさに麻薬的だなと感じた。

"

動画を見て最も強く印象に残っているのは、原子力発電所がある地域の住民の4分の1が原発に関わる仕事をしていたことと、原発反対派がその街の中では少数派であることだった。私は原発事故が起こる前(まだ中学生になりたてくらいだったと思う)原子力発電所は環境に良い未来の世代の新しい発電システムという認識だったのを今回の動画を見て思い出し、事故があったことにより、原発を危険で動かしてはいけないものという認識にいつの間にか変化していたと気づいた。原発がある町からすれば、原発を廃止すれば多くの失業者を出してしまうから、反対派が少数派なのもわかる。原発の問題は、外側だけ内側だけのような片方の視点でを見て解決しようとしてはいけないのだとわかり、同時に果てしなく難しい問題なのだと感じた。